

# えくと bian

6

立川と暮らす 立川に生きる  
E-KUTUBIAN Vol.19 No.273



表紙の人 谷川水車(晴明)

撮影 細江英公

立川から見える山 ⑤

# 御岳山

(929 m)

案内人 守屋龍男



【南西】  
大山  
丹沢山  
富士山  
高尾山

【西】  
大菩薩嶺  
三頭山  
御前山  
大岳山（雲取山）

【北西】  
高水山  
武甲山

## 信仰の山の賑わいと静寂

御岳山は藏王権現を祀る武藏御嶽神社が山頂に鎮座し、少し下の山腹には御岳講の人や観光客が泊まる宿坊や旅館、土産物店が一大山上集落を形成している。ケーブルカーで気楽に登れ、高尾山と並ぶ人気の山岳行楽地だ。その南西約1キロには奥の院の鋭峰(1077m)が聳え、山頂直下に日本武尊を祀る男具那社がひっそりと建つ。こちらは岩場や鎖場がある難路を登らなければならぬので、登山者や参拝者は稀で静寂そのもの。雰囲気は違うが、いずれも古くからの修験の山である。

6月の梅雨の晴れ間、武藏御嶽神社で神樂が一般公開される日に合わせて訪れた。ケーブルカー山頂駅から整備された遊歩道を行く。朝から大勢の人が行き交い賑やかである。神社は後で回ることにし、奥の院峰に向かう。遊歩道を離れ登山道に入ると急に野鳥のさえずりの声が賑やかに聞こえる。ここは日本有数の野鳥生息地でもある。石社がボツンと建つ奥の院峰山頂には深山の雰囲気が漂い、樹木越しに大岳山が見える。

奥の院を下り神社に寄ると、優雅な神樂の舞が演じられていた。本来は神への崇敬を込めて奉納するのだが、この日は一般にも公開されている。古式ゆかしい神樂を、茶髪・金髪に染めた若い少女たちまでが神妙に見ている。時代の変化と、変わらざるものとの対比が鮮烈に感じられた。

気軽な行楽地である  
と同時に峻厳な修験  
の山。御岳の表情は  
多彩で豊かだ。

### 行程

JR立川駅→約1時間=御嶽駅=バス10分=ケーブル下駅=御岳登山ケーブル6分=御岳山駅→20分=奥の院分岐→40分=奥の院峰下り35分=御岳山→20分=ケーブルカーホーム=御岳山駅(往路を戻る)歩程約2時間。  
時間に余裕があれば下山はケーブルカーや車両を使わず参道を下るのもよい(約40分)。杉の巨木が立ち並び江戸時代の参拝道の雰囲気が漂う。御岳山から日の出山経由、つるつる温泉コース(御岳山→50分一日の出山→1時間30分→つるつる温泉→バス20分=JR武藏五日市駅)歩程(帰路)約2時間20分も。

※神樂の一般公開 本年は6月17日(日)午前11時より約1時間。



### 私と御岳山

砂川の農家は昔から西に御岳山や大岳山に雨を乞い五穀豊穣を願ってきた。多くの御岳講があり毎年神社に登ったが、今も続くなのはわれわれ砂川五番講くらい。農家が減り世代交代あっても地域の伝統として残したい。

田中和夫さん(柏町)





# 森よ、生きてくれ！

## 日本山岳会が高尾山で植樹祭

日本山岳会といえば、あのマナルス初登頂など華々しい活躍が印象深いが、近年、岳人たちのフィールドである山を「護ること」にも力を注ぎはじめている。

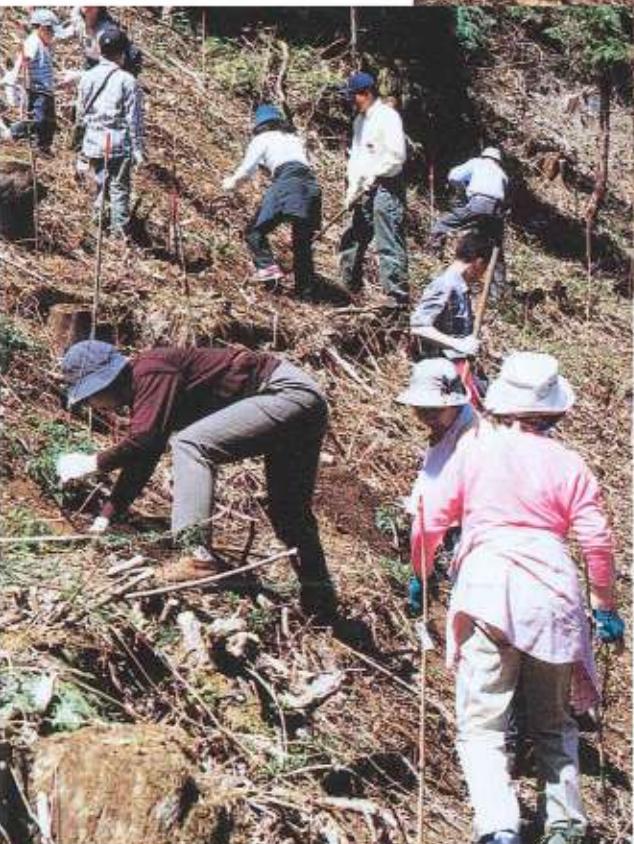
われらが「高尾山」といえば、自然破壊のバロメーター的な存在となっているが、山の再生にひと役かって出たのが同会だ。

陽春の一日「高尾の森づくりの会」(代表・河西瑛一郎氏)が主催、岳人およそ200名が参集した。えくてびあんも、元よりこの主旨に賛同しないはずがない。馳せ参じてみると、同行の中に「立川人」もみられ、すがすがしいひと時を過ごすことが出来た。

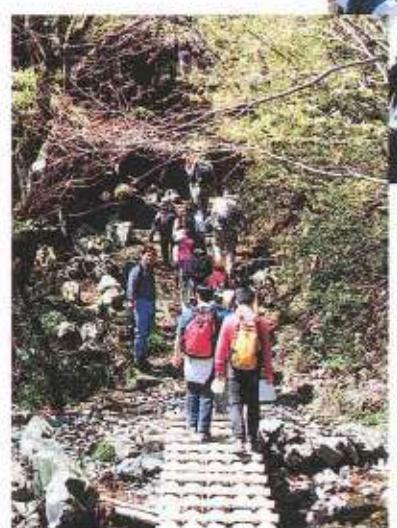
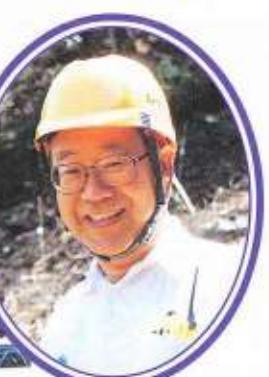
早朝に立川を発ち、高尾旧小下沢キャンプ場に集合、主催者から注意事項などの話をまじえて団結式が執り行なわれた後、景信山方面へ50分ほど登ったところが植樹の現地。参加者は班ごとに別れて鍬で土をおこし、そこへカエデ、ヤマザクラ、ブナなどの苗を植え付けてゆく。

この作業は「学びながら楽しむ自然保護活動」を目的としており、今日明日の成果を求めるではなく、次世代へ豊かな自然を残したいという祈りの中で進められてきている。

森よ、元気に生きつゝけておくれ！



植樹は指導者のよろしきを得て、午前中に順調のうちに進んだ。この「小さな努力」が「大きな力」となる日を待ちながら。



山の空気はさすがに清々しく、都会のそれとはひと味違う。山に親しんできた岳人たちも、さて、これから植樹祭とこゝろ弾ませる。



この日「立川人」も大活躍。上から太田実寿江さん(富士見町)、右に大船武彦さん(栄町)、右下は下島伸介さん(若葉町)。植樹終了後にふるまわれた手作りの「豚汁」に、舌鼓をうつ岳人たちも。





# 墨遊画家・酒井昭尚

(錦町)



第8回 たちかわアートギャラリー展金賞  
「飛驒の街」



墨の絵を描くようになつて、もう三十年近くなります。私の場合、技巧的にはまったくの素人だったんですが、良い師との出会い、これが大きかった。何の基礎もない私の作品を見て、「君のは伸び伸びと自由でいいなあ」と誉めてくれたんです。以来、その言葉は私の「心棒」になりました。

ふつう水墨画というと、いわゆる枯山水の世界を思い浮かべるでしょう? そう見ると私の絵は、水墨画のセオリーカラはずれているのかも知れない。だから、考えました。墨で遊ぶと書いて「墨遊画」。私は日本でただ一人の墨遊画家なんですよ(笑)。師からもらった心棒にかなう、いい肩書きだと思つてます。

そんな私ですから、この度の受賞(たちかわアートギャラリー展・金賞)は本当に思いがけなかつた。でも、ひとつ自信にはなりました。これからも「遊んで」いいんだなって(笑)。

酒井昭尚